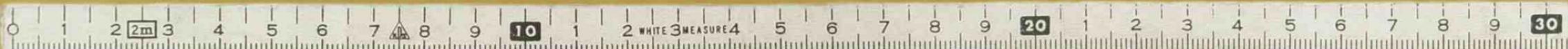
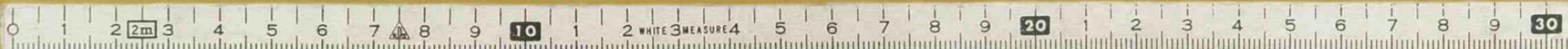


以一時の得たりしを各程回割を付するもの
 法所は出来し初て付し者も後又微しものも
 回割ありて初て付し者も後又微しものも
 かりきふし承りし其もも家初たり
 パテントの法あり第一は傳習せし者も其様を
 許しつる年限の者も余人の其技も雷同とせ
 禁ざらるべし然る時其者元を戻すは其
 ず数多の利益を収むるを得べし然る利益を

専らふしきを得るも第一は傳習せし
 功も報る所以あり叔右の如く第一は傳習せし
 者も数多の利益の得るを見れば他人も我も
 競て新術を付しんと類如し志も前人の
 跡を踐むしをぬせぬ彼写真鏡を付し我の
 傳信様を付しんと我も時辰儀を造る法を習
 はんふど造る立仮初は賣人館も出入り志も
 ても何事そ善き事をも覺へんと造る者なく心を



留まらざるは行り極むの妙法を借るるに如く
且役所の保護ありてお違ふ利分を収むべき
尺込ありは獲を放らて大金を出し或は悪気
様圖を買取らんと思ひ立ち或は造船の法を學
ぶんと企つる者あり下世間の風習はかくも
バ數百千人を擧ぐる智者を命じたるも猶
べし且又行事有限らば莫大の利益なるも
一方は害の生じざるべしとされば遠く之を
我々のバテントの法は於て右の論より
の莫大なる色つていふ常て一害の生じざる
を見ざるは實に國を治る民を治るの政を
行ひたるを
んとれしは是れ過ぐるの良法教多かりし
也
扱又強は法を以てしむるもまた於てハ
如く先づ國都之を取扱ふべき役所を設
置するに依りて又は中にも係せざる
是れ也



振合といひ方今の名目といひ我開成所といひ
遠者其の役所の水ぎまといひと覚えれば何卒我
開成所といひは法を兼修せよといひ人の
命にあらんを宥う葉ふありき存する世間には
藝の日くは感あるは修む開成所も自ら感ある
物りと雖も開成所といひ是を掌ると掌らざるは
強ち論をたせむ水ぎまの局にて掌るとも
片支はるべき一けれは只了成文速は法の助
まて奇器妙術の國中は開け民生日用の助と
あり國家百法の源ともきくむとを偏し希む
望むふらん

卷

四

十

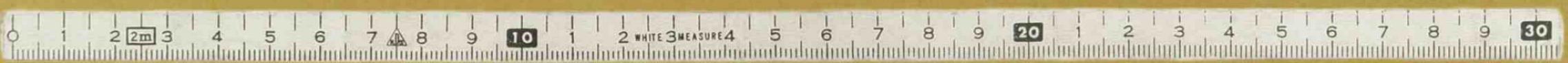
逐月刊行

卷五

西洋雜誌

江戸開物社

宣
便
貳
冬



西洋雜誌卷五

楊江學人輯刻

英吉利五世王系譜

イギリス

デヴォルク

ゼオルジ二世王

享保十二年又王ゼオルジ一世の位を嗣き宝暦十年没

フレデリキ、ロウ井ス

英の世子王位

を継ぐ

ロウ井セ

陸王又淑一子と
生宝暦元年没

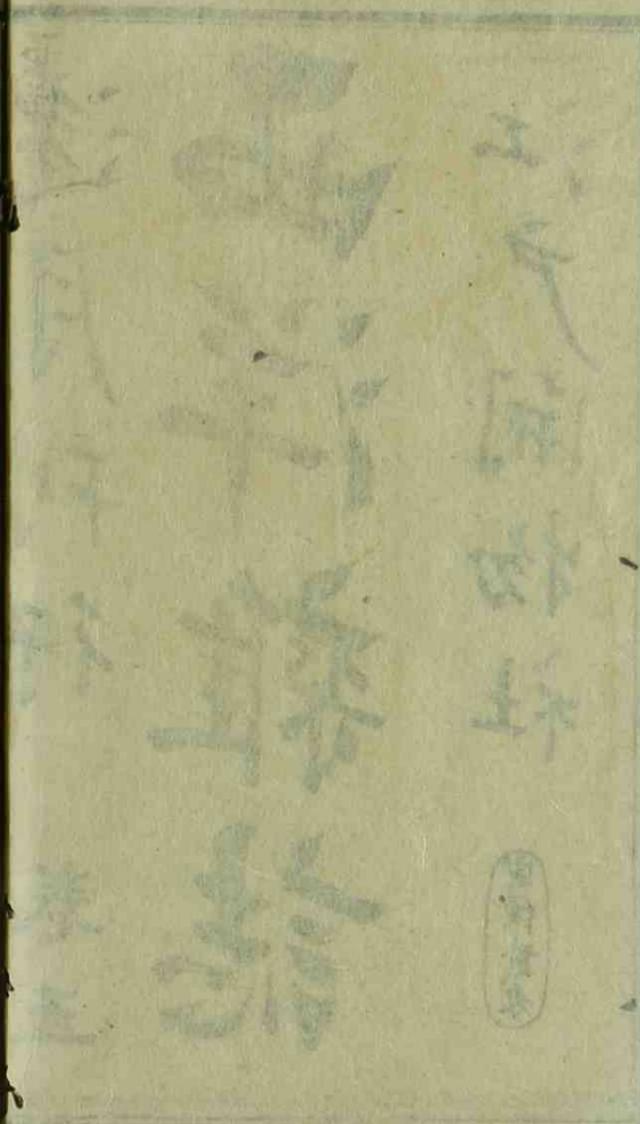
ゼオルジ三世王

寶暦六年即位

文政三年没

カロリ子、マダレ

陸王又淑一子と
生安和四年没



ロウ井セの夫
噺王フレデリキ五世 延享二年
即位明和三年没

フレデリキ継娶
ジュリヤ子、マリヤ
ブロンスエイキ候の女

噺國公子フレデリキ
文化五年没

噺王キリスチヤン八世 天明六年
生オウダステングル公の女
没天明九年没

女
ロウ井セ、カルロツテ 天明元年生
文化七年ヘスセン候并ル
ルムは嫁を

フレデリキ、ヘルヂヤント
寛政四年生 文政五年
○噺王の女カロリ子と嫁を
ヘスセン

黒西國侯

ヘツセンカーセル候并ルム
文化七年ロウ井セ、カルロツテ
を娶る

カロリ子の夫
噺王キリスチヤン七世 明和三年
即位文政五年没

女
ロウ井セ 寛政元年ヘス
センカーセル候
チヤルリスは嫁を

噺王フレデリキ七世 文化五年
生オウダステ王の位を嗣
文久三年没

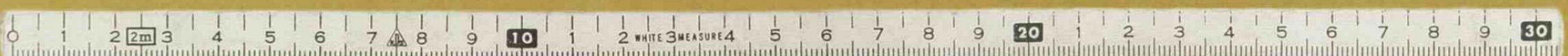
女
マリヤ アンハルト公は嫁を

女
ロウ井セ 文化五年生 天明十三年
キリスチヤンは嫁を 六子
を産む

フレデリキ、并ルリヤム
普魯士王の女アンナと
嫁を

女
オウグステ 男爵ブリ
キセン、ヒ子
ケは嫁を

女
ロウ井セ、カロリ子 文政元年
ヘスセン
カーセル



女
オウギユステ ①カムブリジ
公は娘ニ子
を生む其長子ゼオルジ
今のカムブリジ公

ロウ井セの夫
噯國公子キリスチヤン
文政元年生天保十二年
ヘスセン候の女ロウ井セ
を娶ふ初スレスウエイキ
ホルステイン又封せられ
後噯王フレデリキ七世の
後を嗣ぎ文久二年没を

女
アレキサンドラ 弘化元
年生
文久二年 ⑤英の世子
は嫁を

井ルリヤム 弘化二
年生

女
マリーダグマル 弘化四
年生

女
ザイラ 嘉永六
年生

ワルデマル 安政五
年生

二
候千ヤルリスの女子
て寛政元年グリニクス
ブルク公フレデリキ
は娘一教子を生む

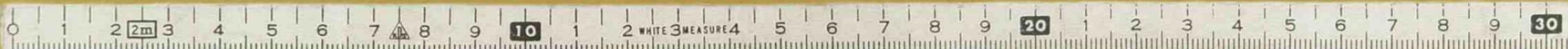
グリユクスブルグ公千ヤルス
①噯王の女井ルニナを
娶ふ
公子教名 略之

噯王フレデリキ六世 文化
五年
即ち天保十年没を

女
ロウ井セ、オウギユステ 文
ウ
グステンブルグ公は嫁を

女
カロリ子、アマリー 文
ウ
ブルグ公の女子を寛
政八年生噯王キリスチ
ヤン八世 ④は嫁一フレデ
リキ七世を生み方今
嫁は

女
カロリ子 文政五年生文政
十二年 ①フレデ
リキ、ヘルヂヤントは嫁を



セオルジ四世王 文政三年即位天保元年没也

井ルレム四世王 天保元年即位天保八年没也

ケント公エグユワルド

ハント王エル子スト 天保八年

ハノーフル王セオルジオ五 嘉永四年即位

カムブリジ公 へスセン侯の女①オウグステを娶す

女 ヒクトリヤ 天保十一年生 安政五年 普魯士王の世子フレデリキ、井ルリヤムと嫁す

アルベルト、エドワルド 天保十二年生 英國世子又ニラ文久二年 連王キリスチヤンの女アレキサンドラと娶す

井ルレム子、マリヤ 文化五年生 ①グリュクスブルグと嫁す

ヒクトリヤの夫、コブルグの公子、アルベルト してヒクトリヤと同年又生れ、文久元年没也

女 ヒクトリヤ 文政二年生れ 天保八年即位

即き天保十一年、コブルグの公子アルベルトと嫁す 即ちその女と嫁す

カムブリジ公セオルジ 文政二年生

女 オウギユステ 文政五年生 ステレリツ公と嫁す

女 マリー 天保四年生

普魯士王の世子

英國世子

女アリセ 天保十四年生 文久二年へスセシタルム
スタットの世子ロウ井ス又嫁す

アルフレド 弘化元年生

女ヘレナ 弘化三年生

女ロウ井サ 嘉永元年生

アルヂェル 嘉永三年生

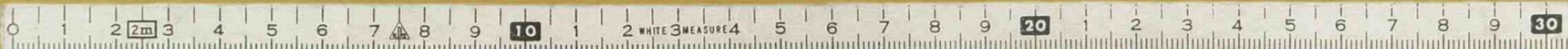
レオポルド 嘉永六年生

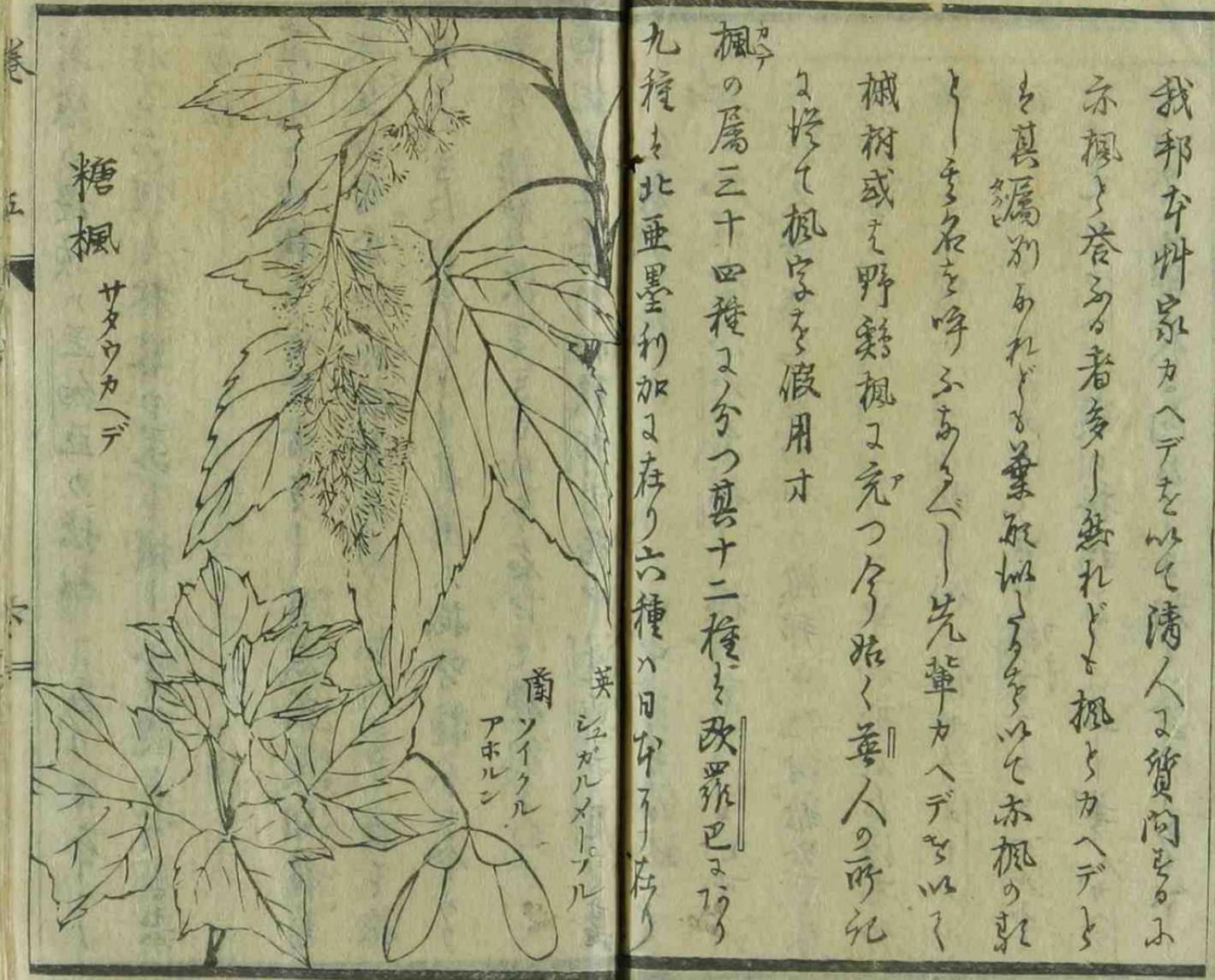
ピートリセ 安政四年生

○糖楓の説

田中芳男後述

按又地理全志合意部ニ楓樹葛茂汁甘了以
茲種又聯邦志異^{コイナ}聯邦の條邦中楓樹雜出春取
其汁熬之則成糖と云り五車勅府及ハ海軍對
譯の字書皆メトフル樹を楓と存せりメトフル
英^{ラテ}行蘭^{ラテ}コハアホルンと云ハ^{ラテ}糖^{ラテ}丁^{ラテ}とアセル中
ハハ是れカヘテ類の標榜あり蓋^{ラテ}華人カヘテ
を以て支那人と云ひ^{ラテ}楓と云ハ^{ラテ}あま^{ラテ}

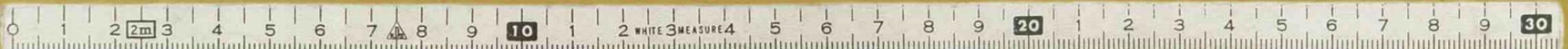




糖楓 サタウカ(デ)

英
シカルメトブル
南
ソイクル
アホルン

我邦本州家カヘデを以て清人又質問するふ
 亦楓と蒼ある者多し然れども楓とカヘデと
 も甚^タ屬別ありども葉取似たりを以て赤楓の類
 とし之を呼ぶふありて一先^ニ華カヘデを以て
 槭樹或は野槭楓と充つ今^ハ始く華人の所紀
 として楓字を借用す
 楓^カの屬二十四種に分つ其十二種を改^ニ羅巴^ニたり
 九種を北亞墨利加に在り六種は日本に在り



其條の種類ハ亞細亞の法部ニ存リ日本ニ
存ルニ種々林容の美を成シ賞觀を可き者
あり

草木の内種を食む者多シ甘蔗、茶葉、胡蘿蔔
鳳梨、五蜀黍、椰子等是あり楓樹悉く糖を採
收すべし非ざれども其屬大抵皆糖分を食う
糖中糖質最多きものを名けて糖楓と云ふ
糖楓ニ亞墨利加聯邦内糖中邊西華尾を其

本地ノ人之を改羅巴ニ植す亦能く繁殖す
酷寒の時候ニ方りて樹中夥多の甘液を生じ亞
墨人の糖を採るや雪の將ニ消融する頃ニ於てハ
毎日晴ニ乘リて樹幹ニ小孔を穿ち流を抽出シ
液を採取取り之を煮て舍利別稠厚蜂蜜と云
型或は槽ニ注ぎ冷定されバ褐色の塊と云ふ是
れ即ち楓糖ニシテ其質甘蔗より採りたる糖ニ
異ある事あり之を再び精製されバ潔白精好

の糖とれる

大抵一本の樹より年々四斤の糖を得て

樹身は朽ても亦も害に事あり 糖の製式後編に續刻也

樹は甘蔗を暖地より水をバ培育し糖を

北地山中より自生し培養を待て且製造し

労なきを以て亦毎より製し自ら用ふるは

便あり サダカカニ 彼糖楓の圖を檢するは亦曾のソロソコ

カヘデ 江戸にてイハ子 にお似たり他日之を試す

べし且形状の異同を拘らば遍く楓の屬を檢

査し糖質の多少を實驗せしむき遇ふ所

らるん

○石脳油を以て石炭に代用するの説

合衆國政府近來石脳油を以て石炭に代へ蒸

氣の用を充んとし水師の工長も命し種々其

利用を試験し及つり揮石脳油蒸氣の力に石炭

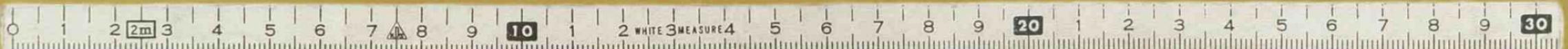
よりはるがま強く二十八分時の間は蒸氣の力

を起ると二十斤に及ひ石炭の如きも四十分時
より少しづれば此力を起す事能くば加之石炭
油の價甚ぞ廉くして己は亞墨利加より英國に
往來する蒸氣船ペルシヤ船に用ひ試すに大に
費用を省きしなり且船中此油を貯るに枝
溢の室よりして足まり故に航海に之を用ふ時を
費用を省く事少くは近來俄國及び加利
福尼亞等に於て石炭油を出るの地を發明し此

油を産する事甚多し故に其用を世より廣く
とせんとす

按るに我邦石炭油を産するの地少くは
就中北越又多し俗に臭水油と稱す

天智天皇の御宇越國燃る土燃る水を獻
と記されたる燃土は即ち石炭燃水も即ち石
炭油あり此油多く出つと雖も其用罕ある故
に世に廢物の如く思へり然るに今此説を獲



まれば祀して他日閉物と志を博雅の友考ふ
備ふのみ

○石脳油の効用并アニリ子と名くる画
料の記

此油と一種天造の山物なりて古来其効用を
詳しむ也 扱は医家にて殺蟲劑として
用る事あれども僅くの事 只これに焚

て燈に代るの議論あれども其後と尚或を辨
駁せられ或を左袒せられ未だ一定に至らざる

然るに近來の發明は投れば此油唯能く蚤虱
の類有害乃虫を除くはたふらん是を以て

アニリ子と名くる画料を製し出以て其を得
たりと云ふ元來アニリ子も世人の知る如く

藍靛中の一成分なりて甚鮮美あり蕃薇色
の画料あり是を製する常方ハ上好の藍靛を

沸騰沙の濃き溶液と和されハ即ち赭色
なりて油の如き物と成る扱これに蒸餾され

を透明な色の液を得る。此液即ちアニリ子
スギトホリ
を以て香氣酒のやく味甚苛烈なり。舌を刺
以此アニリ子を以て結し。其塩類を総て白色
あれども其氣は解れて速に蓄薇色を帯ひ
る。黄色に變はれ或は試す白色の薄片をアニ
リ子塩の溶水中に投ずれば、輒に深黄色に
變はれ、塩酸を加へば此塩を種々の色に變せし
む。但し其稀稠は随て或は綠色或は藍色
或は黒色とある。然るにアニリ子の價廉あり
ざるを患とせしに、近來の試験は賤價を以て
石腦油を化してアニリ子を製し、此の方
を蓄薇せり。又此油を以て揮發芳香の亞的
兒を製し、并に此油を石炭の代りに、蒸留機
に用ふる者あり。其効用は少く、いと云

按近年船齋乃画料中蓄薇色を以て
極りて美麗なる者あり。原名アニリ子紅一